

串本海中公園 マリンパビリオン

2026. 7

Vol. 55, No. 4



ムラサキウミコチョウ

Sagaminopteron ornatum (Tokioka & Baba, 1964)

本種はウミコチョウ科ムラサキウミコチョウ属に属する。最大体長は約 12 mm。体形はナメクジ型だが、大きな側足が体を包みややずんぐりしている。体の地色は紫色。頭部には頭楯を形成する。触角はないが、橙色の大きな突起がある。また、体の後方にも根元でつながる大きな突起と小さな突起がある。突起の色はすべて橙色で細い白色で縁取られる。外見からは見えないが、埋在する薄い小さな貝殻がある。本種は大きな側足ではばたくように遊泳することができ、刺激すると遊泳して逃げる。写真の個体は 2025 年 10 月 6 日に海中展望塔で発見された。

松永 康大

串 本 海 中 公 園 セ ン タ ー

テンジクダイ科の稀種ヤツトゲテンジクダイの 和歌山県からの追加記録

大西 遼

ヤツトゲテンジクダイ属のヤツトゲテンジクダイ *Neamia octospina* Smith and Radcliffe, 1912 は、インド・西太平洋に広く分布する最大体長約 5 cm の小型のテンジクダイ科魚類である (Fraser and Allen, 2001)。本種は、国内では和歌山県から琉球列島にかけて記録されており、和歌山県では 2023 年 6 月に串本町潮岬の漁港で 1 個体の稚魚が採集されている (林, 2013 ; 大西・吉田, 2024)。

2024 年 1 月 25 日に潮岬の漁港で新たに 1 個体のヤツトゲテンジクダイが採集されたため、ここに報告する。

材料と方法

本標本は夜間に集魚灯を使用した灯火採集により得られた。標本は 10%ホルマリン溶液で固定し、70%エタノール溶液に置換して保存した。標本の計測はデジタルノギスを用いて 0.1 mm の単位で測定した。本報告に用いた標本は和歌山県立自然博物館 (WMNH) に登録・保管されている。

結果と考察

Neamia octospina Smith and Radcliffe, 1912
ヤツトゲテンジクダイ (図 1、2)

標本 : WMNH-PIS 14225、体長 13.3 mm、和歌

山県東牟婁郡串本町潮岬浪ノ浦 (33°26'48"N, 135°46'19"E)、水深 0.1 m、2024 年 1 月 25 日 19 時頃、タモ網 (集魚灯)、大西 遼。

上記標本は、第 1 背鰭が 8 棘で、第 8 棘が皮下に埋没しないこと、胸鰭条数が 17 と多いこと、眼から 4 本の橙色線が伸びることなどの特徴が Fraser and Allen (2001) や吉田ほか (2018) の示したヤツトゲテンジクダイ *N. octospina* の特徴に一致したため、本種に同定された。本種は成長に伴い体形や色彩が変化することが知られており、本標本の色彩は大西・吉田 (2024) により報告された本種の稚魚の色彩と概ね一致していた。

本種は、国内では和歌山県串本、大隅諸島 (口永良部島、屋久島)、および琉球列島 (沖縄島、慶良間諸島、石垣島) から確認されている (Ida and Moyer, 1974 ; 林, 1996 ; 吉郷ほか, 2005 ; Yoshida et al., 2010 ; 林, 2013 ; Motomura and Harazaki, 2017 ; 吉田ほか, 2018 ; 大西・吉田, 2024)。

本種の現在の分布北限は和歌山県串本であるが、2023 年に採集された個体 (体長 13.8 mm) は黒潮により南方域から偶発的に輸送された個体であると考えられている (大西・吉田, 2024)。本標本についても、大西・吉田 (2024) により報告された個体と同程度のサイズであることから仔稚魚期に南方域から黒潮により輸送された個体であると考えられる。また、本標本は低水温期である 1 月下旬 (採集時の水温 15.8℃) に採集されたが、採集後にバケツへ収容したところ数分で死亡した。死亡要因は明らかではないが、外気温 (



図 1 . 和歌山県串本町産のヤツトゲテンジクダイ (WMNH-PIS 14225、体長 13.3 mm)



図2．採集直後に撮影された生時のヤツトゲテンジクダイ

8℃) による急激な水温低下である可能性が高い。本種の和歌山県沿岸における越冬の有無については明らかになっていないが、黒潮の大蛇行終息後（採集時は蛇行中）は1月から3月にかけての水温が蛇行時よりも上昇傾向にある。そのため本種の本県沿岸における越冬の有無については、今後も継続的な調査が必要である。

謝辞

和歌山県立自然博物館の平嶋健太郎氏には標本の登録を行っていただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

引用文献

- Fraser, T. H. and G. R. Allen. 2001. A new species of cardinalfish in *Neamia* (Apogonidae, Perciformes) from Mauritius, Indian Ocean, with a review of *Neamia octospina*. Records of the Western Australian Museum, 20: 159-165.
- 林 公義. 1996. 日本産テンジクダイ科魚類の動物地理学的研究—奄美諸島における特性—. 横浜国立大学環境科学研究センター紀要, 22: 113–122.
- 林 公義. 2013. テンジクダイ科, pp. 826-864, 1979-1986. 中坊徹次（編）日本産魚類検索全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.
- Ida, H. and J. T. Moyer. 1974. Apogonid fishes of Miyake-jima and Ishigaki-jima, Japan, with description of a new species. Japanese Journal of Ichthyology, 21: 113–128.
- Motomura, H. and S. Harazaki. 2017. Annotated checklist of marine and freshwater fishes of Yakushima island in the Osumi Islands, Kagoshima, southern Japan, with 129 new records. Bulletin of Kagoshima University Museum, 9: 1–183.
- 大西 遼・吉田朋弘. 2024. 和歌山県串本町から得られた北限記録のヤツトゲテンジクダイ. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 40: 63-65.
- Yoshida, T., Harazaki, S. and Motomura, H. 2010. Apogonid fishes (Teleostei: Perciformes) of Yakushima Island, Kagoshima Prefecture, southern Japan, pp. 27–64. In Motomura, H. and K. Matsuura (eds.) Fishes of Yakushima Island – A World Heritage island in the Osumi Group, Kagoshima Prefecture, southern Japan. National Museum of Nature and Science, Tokyo.
- 吉田朋弘・木村祐貴・本村浩之. 2018. 鹿児島県口永良部島から得られたテンジクダイ科魚類ヤツトゲテンジクダイ. 日本生物地理学会報, 72: 236-241.
- 吉郷英範・市川真幸・中村慎吾. 2005. 比和町立自然科学博物館魚類収蔵標本目録 (IV). 比和町立自然科学博物館標本資料報告, 5: 1–51.

台風 6 号による鯖浦海岸水中被害状況

佐久間 夢実

5月27日に発生した台風6号は、強烈な波浪を作り出し、海中展望塔に大きな被害をもたらした (Vol.55 p, 23)。海中展望塔の窓から見える一部のサンゴは、その激しい波によって破壊され、水中景観が大きく変わった。今回は鯖浦周辺における水中の被害状況を報告する。

・水族館前港内 (図1、図2A・B・C)

水族館前の港から数メートル先には、スギノキミドリイシの大群落がおおよそ 40 m 四方に広がっており、大型のクシハダミドリイシやキクメイシ類も多く生息する地点である。テーブル状のクシハダミドリイシは特に波の影響を受けやすいため、大型の個体は基盤の岩ごと剥がれ落ち横転していた (図2A)。クシハダミドリイシが定着していたであろう場所も、岩肌が露出しさら地となっていた (図2B・C)。また、基盤から剥がれたサンゴは岩に打ち付けられ、小さな破



図1. 破片となったクシハダミドリイシ

となって辺りに散らばっていた (図1)。

・海中展望塔付近 (図2D・E・F、図3)

海中展望塔付近はクシハダミドリイシなどのテーブルサンゴが多く生息し、南側にはショウガサンゴの群生地がある。海中展望塔の南側の窓から見えていたクシハダミドリイシは崖の下へと転落し、さら地となった (図2D)。ショウガサンゴは枝の先端が折れ、骨格の断面が露出していた (図2F)。群生していた個体のほとんどが折れてしまった (図3 白い斑状の部分が全て折れた骨格の断面)。

今年の台風は例年よりも多く発生する見込みのようだ。今回の台風のように波が南側から侵入すると、台風の規模が小さくても高波を作り、再び海中展望塔や水中への被害が予想される。年月をかけて造形されたサンゴが、一瞬で崩れてしまうのは非常に残念だが、力強く成長し再び美しい水中景観を作ってくれることを願うしかない。サンゴを生息地とする甲殻類や熱帯性魚類の出現数の変動も懸念されるだろう。



図3. 断面が露出しているショウガサンゴ

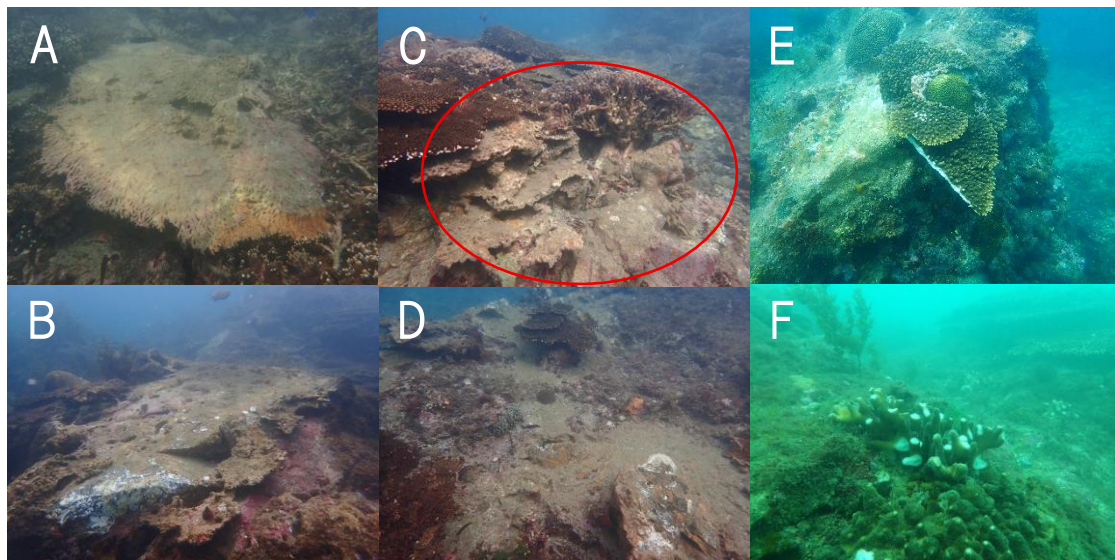


図2. 鯖浦海岸におけるサンゴの台風被害

トンネル水槽珍客 展示水槽編

佐久間 夢実

当館は水槽水に自然海水を使用している。目の前に広がる新鮮で栄養豊富な自然海水をポンプで組み上げ、常に水槽に注水することができる。各水槽に入る前に濾過砂を通さずに注水されるため、当館の水槽内には小型甲殻類や多毛類、ヒトデなどが勝手に入り込み展示生物と共に暮らしている。

今回は、当館の水中トンネル水槽にてマンリョウウミウシが採集されたため紹介したい。

マンリョウウミウシ *Carminodoris armata* (図1・2)

体色は淡褐色から暗褐色で、不規則な斑模様がある。背面は無数の大きな突起で覆われ、各突起の先端は灰色。本種は北海道から鹿児島県本土の日本海・東シナ海・太平洋沿岸に生息する温帯種であるとされ、浅海の転石帯などに生息している。本個体は2026年の1月11日にトンネル水槽内で採集された。全長は約7cm。朝の開館準備中に本水槽内の壁を這って移動しており、発見後すぐに潜水し採集した。同水槽で展示していた魚に腹部を突かれたのか、内臓が飛

び出ていた(図1下赤丸)。

本水槽は水量約1250tの当館では最大の水槽であり、メジロザメやホシエイ、ロウニンアジなどの大型魚類が展示されている。本種は幼生期に取水ポンプで水族館の貯水槽へと送り込まれ、さらに本水槽の取水ポンプにて本水槽内に送られ、人知れずすくすくと成長していたと考えられる。なお、本種はミカーレカイメン属等を捕食するカイメン食のウミウシであることが知られている。トンネル水槽には自然海水から侵入したであろうカイメン類が、擬岩内外や壁面に多く生息している(図2下)。水槽内に生息するカイメン類がミカーレカイメン属かは不明だが、本種はこのカイメン類を捕食し、生きながらえていた可能性が高い。

自然海水を使用することで、今回のように思わぬ生物に遭遇することがある。特に水槽規模の大きいトンネル水槽は、擬岩やサンゴ石の大きな隙間、広大に広がる底砂など、小さな生き物が生息できる場所が豊富である。水槽内の水を抜いて一掃することもないため、カイメン類のような固着性生物には増殖しやすい環境なのかもしれない。トンネル水槽には他にも様々な生物が生息しているため、今後も紹介して行きたい。

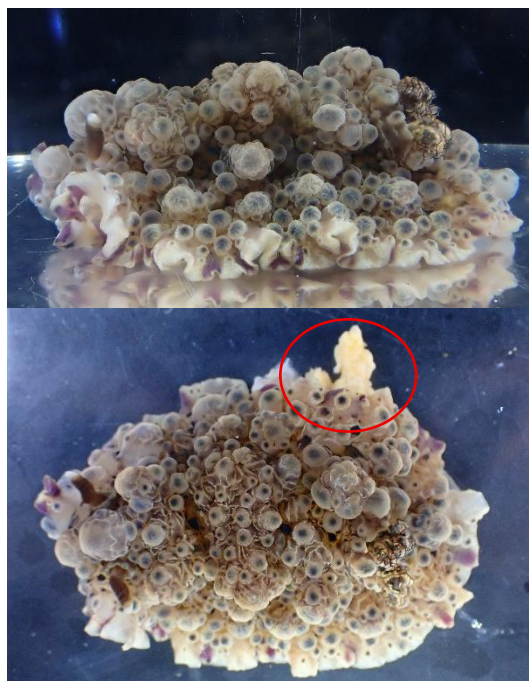


図1. 上：側面 下：背面



図2. 上：発見時の本種 下：水槽内に生息するカイメン類

ウミガメ人工産卵場での産卵時刻まとめ

吉田 徹

以前のウミガメ人工産卵場では、産卵期には目視で直接ウミガメの産卵を調査していた。だが、調査者の体力的に夜通しで観察は出来ないため、概ね 24 時以降の深夜から明け方にかけての調査は諦めていた。しかし、2019 年に監視カメラを導入し深夜帯も調査が可能となった。そこで、どの時間帯に産卵が多いのか、深夜帯の産卵はどの程度あるのか等、人工産卵場での産卵時間の傾向を紹介したい。

今回参照した記録は、2019 年から 2026 年に観察された 8 年間分 123 回の産卵記録である。種別の内訳は、アカウミガメが 11 頭 (+不明個体) で 112 回、アオウミガメ 1 頭で 11 回となっている。また、ウミガメの産卵行動は上陸から帰海まで 1~2 時間ほどかかるが、今回の「産卵時刻」は実際に卵を産み落としているタイミングの時刻である。

図 1 に 123 回の全産卵記録を 30 分毎の時間区分に振り分けたグラフを示す。最も頻度が高かったのが 21:30 (15 回)、次いで 24:00 (14 回)、21:00 (11 回) と続いた。21:00 から 26:00 までに 99 回の産卵が見られており、この間で全体の 80% を占めた。野生のウミガメの場合、産卵時間は主に 21:00 から 27:00 の間とされているが、これは飼育下でも同様の傾向であった。また、16:00 から 19:00 までのかなり早い時刻での

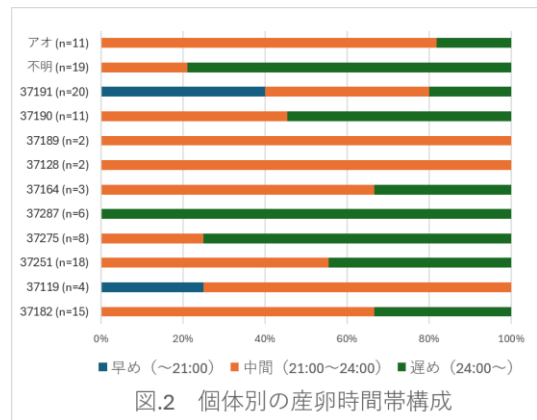


図.2 個体別の産卵時間帯構成

産卵が 5 回見られたのは特徴的であった。産卵期の日没時間は概ね 19:00 頃であるため、これらはまだ周囲が明るい状態で上陸し産卵を行っている。野生では極めて稀な産卵だが、当館では 123 回中 5 回 (約 4%) 確認された。また、この 5 回の産卵は 3 頭によって行われたが、全て幼体時から飼育されてきた個体であった。

次に図 2 に個体別の産卵時間帯構成を示す。産卵時刻を「早め (～21:00)」、「中間 (21:00～24:00)」、「遅め (24:00～)」の 3 つに分け、それぞれの個体の割合を示す。このグラフでは、明らかに通常の産卵行動とは異なる日没前 (19:00 以前) の産卵データは除外した。アオウミガメは 1 個体のみ、番号個体はアカウミガメとなっており、「不明」は複数頭のアカウミガメの可能性はある。

ここでは個体ごとの傾向が伺え、明らかに早い時間帯に偏っている 37191、中間型のアオ、24:00 以降に偏っている 37287 や 37275、混合型の 37190、と個体によって産卵の癖が感じられ、今

後の産卵調査での予測に役立ちそうである。

全体の割合では、中間 (21:00~24:00) が 48%、遅め (24:00~) が 45% と深夜帯の産卵割合もかなり多くなっており、深夜帯の調査の重要性が強く感じられた結果であった。

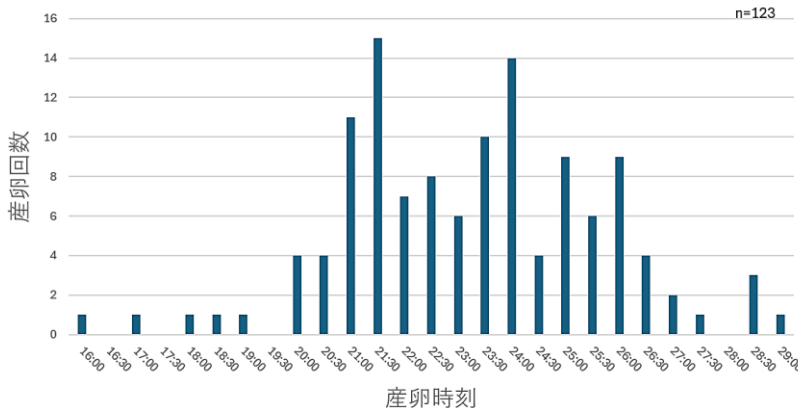


図.1 時間帯別産卵回数

ウミウサギガイの飼育展示の紹介

中村 公一

ウミウサギガイ *Ovula ovum* (Linnaeus, 1785) はウミウサギガイ科ウミウサギ属に分類される巻貝の一種である。殻高は大きいもので 10 cm 前後、卵型で光沢のある純白の殻を持ち、本種の和名はここに由来する。普段は外套膜で殻を覆っているが、こちらは殻の色とは対照的で黒色で細かな白点が散在する（図 1 上）。分布は紀伊半島以南とされており、当館地先海域でもみることができる。現在も館内『小さな海の忍者たち』コーナーにて 2 個体展示しており、そのうちの 1 個体は 2025 年 2 月から長期に渡って飼育中である。今回は当館におけるウミウサギガイの飼育について紹介したい。

ウミウサギガイの飼育展示において最も大切なことは餌を安定して与えることであろう。ウミウサギガイはウミトサカ類などのいわゆるソフトコーラルを主食にしている。当館地先海域ではシバヌメリトサカやユビノウトサカの上で見つかることが多い。よって、当館では潜水作

業の合間に上述のウミトサカ類の一部を切り取ってきたものを餌として与えている。ウミウサギガイ自体は積極的に摂餌するため、餌の消耗は割と早い。それに加え、ウミトサカ類は飼育が難しいため水槽内のウミトサカ類が死にやすい夏期などは頻繁に餌の採集に行かねばならない。数日であれば餌のない状態でも大丈夫ではあるのだが、台風の影響で時化が続いた時などは心配になる。また、餌を食べる量が多いのに比例して糞の量も多い。展示水槽は幅約 100 cm のガラス水槽を多孔板で 5 部屋に仕切った連結水槽の一室で、多孔板の定期的な掃除をしないと糞や粘液で穴が詰まって水が溢れそうになることがある（図 1 下）。

本年 4 月 30 日には地先海域において潜水中にウミウサギガイの幼貝を発見した（図 2 左）。幼貝は成貝と違いイボ状の突起を外套膜に持ち、先端が黄色、その下が白色からグラデーションで黒になっていく。食性は成貝と同じなので、成貝に与えるウミトサカ類の一部を切り取って与えた。採集当初は殻高がおよそ 1.5 cm と小さかったため、成貝と同じ水槽に隔離ケースを入れて展示していたが 1 か月もするとケースが手狭になるほど成長し、採集から 3 か月が経過した現在では殻高 7.2 cm となり先住のウミウサギガイと簡単には見分けられないほどの大きさになっている（図 2 右）。

ウミウサギガイの展示は地先で餌を安定して手に入れることのできる当館ならではの展示の一つである。今後も本種の魅力を引き続き来館者に伝えていきたい。



図 1. 上：ウミウサギガイ 下：多孔板に詰まったウミウサギの糞

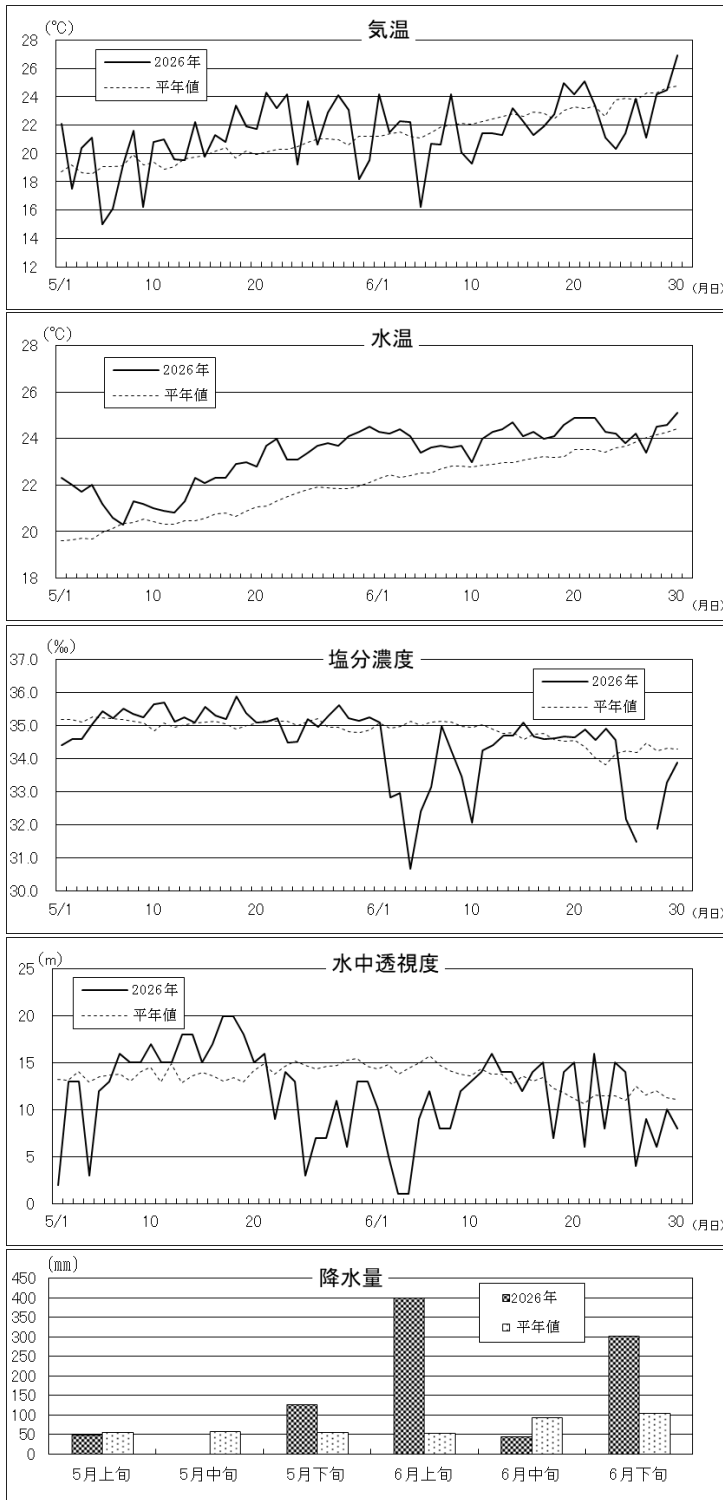


図 2. 左：幼貝（4 月 30 日撮影）
右：現在の様子（7 月 29 日撮影）

鯖浦の海から

森 美枝

今年の夏は、朝からうだるような暑さが続いている。それもそのはず、気象庁によると7月21日から26日まで潮岬の最低気温が27度以上、22日は最低気温28度を観測し、観測史上最も高い最低気温となった。先日も目の前の磯で生きものの観察会を行ったが、タイドプールに足をつけるとまるで温泉に入っているようで、余計に暑さを感じた。それでも、大阪から来た人からは海風が冷たく感じて気持ちいい、と言われた。都会は、風すら熱いそうだ。確かに、大阪や名古屋では、連日35度以上の猛暑日を記録しているが、串本では今年35度を越えた日はまだない。というか、潮岬の観測所で35度以上を記録した日は1913年の観測開始以来2日しかない。40度以上を酷暑日と呼ぶ時代になったが、串本に住む私たちには想像すらつかない暑さである。磯観察では、お湯のような潮だまりで、ウニやナマコ、ヒトデ、カニ、エビ、小魚など、多くの生きものを見つけることができた。人は冷房の効いた部屋で暑さをしのぐことができるが、自然の生きものたちは、厳しい環境に耐えていかなければならない。今年は6月の台風、7月の猛暑、そして8月には猛烈な勢力の台風の接近も予想されている。海の生きものたちが無事に乗り切ってくれることを願うとともに、私たちもこの厳しい夏をたくましく乗り越えたい。



鯖浦定置観測結果(月平均値と平年値比)

	5月		6月	
気温	20.8℃	+0.9℃	22.1℃	-0.5℃
水温	22.4℃	+1.6℃	24.1℃	+1.0℃
塩分濃度	35.2‰	+0.1‰	33.8‰	-0.9‰
水中透視度	13.0m	-1.0m	10.4m	-2.6m
月間降水量	174.7mm	+7.6mm	743.9mm	+495.7mm

マリンバビリオン Vol.55, No.4 通巻 507 号

発行日 令和8年8月17日

編集兼発行人

〒649-3514 和歌山県東牟婁郡串本町有田 1157

(株) 串本海中公園センター

電話&FAX 0735-62-4875

ホームページ <http://www.kushimoto.co.jp/>

(本誌は上記からも無料配信中)